

「底が突き抜けた」時代の歩き方 360

激流の「まっただなか」から解放された後も

人生の「まっただなか」 - 映画『太陽の雫』

フランクルの『夜と霧』には、《収容所を解放された被収容者の心理》についても記述されている。《ある朝、収容所のゲートに白旗がひるがえった》とき、被収容者たちは《大喜びしただろう》か。収容所生活における《精神的な緊張のあとを襲ったのは、完全な精神の弛緩だった》という。

《疲れた足を引きずるように、仲間たちは収容所のゲートに近づいた。もう立っていることもできないほどだったのだ。仲間たちはおどおどとあたりを見回し、もの問いたげなまなざしを交わした。そして、収容所のゲートから外の世界へとおずおずと第一歩を踏み出した。号令も響かない。鉄拳や足蹴りを恐れて身をちぢこませることもない。ああ、それどころか、収容所監視兵のひとりに至っては、煙草を差し出したのだ。わたしたちは監視兵たちをにわかに判別できなかった。手回しよく、いつのまにか平服に着替えていたからだ。》

わたしたちは、ゲートから続く道をのろのろと進んでいった。早くもひとり足が痛んで、歩くのも容易ではなくなった。さらにわたしたちは足を引きずって、ゆっくりと歩いていった。収容所のまわりの景色を見てみたい。いや、自由人として初めて見てみたい。わたしたちは自然のなかへと、自由へと踏み出していった。「自由になったのだ」と何度も自分に言い聞かせ、頭のなかで繰り返しなぞる。だが、おいそれとは腑に落ちない。自由という言葉は、何年ものあいだ、憧れの夢のなかですっかり手垢が付き、概念として色あせてしまっていた。そして現実^まに目のあたりにしたとき、霧散してしまっただのだ。現実が意識のなかに押し寄せるには、まだ時間がかかった。わたしたちは、現実をまだそう簡単にはつかめなかった。

牧草地までやってきた。野原いちめんに花が咲いている。そういうことはよくわかる。だが「感情」にはたっししない。歓喜の最初の小さな火花が飛び散ったのは、色鮮やかなみごとな尻尾の雄鶏を見たときだった。だが、この歓喜の火花も一瞬で消えた。わたしたちはいまだにこの世界に参入を果たしていなかった。それから、ひともとのマロニエの木陰の、小さなベンチに腰をおろした。ところがなんとしたことが、わたしたちの表情にはなんの変化もない。やっぱり。わたしたちはまだこの世界からなにも感じない。

夜、仲間はずもとのむき出しの土間の居住棟にもどってきた。ひとりがもうひとりに近づいて、こっそりたずねる。

「なあ、ちょっと訊^きくけど、きょうはうれしかったか？」

すると、訊かれたほうはばつが悪そうに、というのは、みんなが同じように感じているとは知らないからだが、答える。

「はっきり言って、うれしいというのではなかったんだよね」

わたしたちは、まさにうれしいとはどういうことか、忘れていた。それは、もう一度学びなおさなければならないなにかになってしまっていた。》

何度も夢にみても裏切られてきたために、《今この自由は、はたしてほんとうに現実なのだろうか。》にわかには信じられなくなっているのだ。だがこの離人症的状态も長くは続かない。変化はすぐやってくる。

《だが、その日は来たのだ。体は精神ほどにはがんじがらめになっていなかった。待ってましたとばかりに、体はのっけからこの現実を利用した。文字通り、現実につかみかかった。つまり、わたしたちはがつがつとむさぼり食ったのだ。わたしたちは何時間も、何日も食べた。それが深夜に及ぶこともざらだった。人はどれだけ食べることができるのか、信じがたいほどだった。解放された被収容者のだれかれが収容所近くの親切な農家に招かれると、彼はまず食べ、コーヒーを飲んでから、ようやく舌が滑らかになり、そして語りはじめるのだった。何時間もかかる、彼の物語を。何年ものあいだ、重くのしかかっていた抑圧から解放されたのだ。彼が語るようすは、まるで心理的強迫であるかのようだった。それほどに、彼は語らずにはいられないのであり、話さずにはいられないのだ(たとえ短いあいだでもきびしい重圧のもとにあった人、たとえば秘密国家警察^{ゲシユタボ}の尋問にあった人にも同じようなことが観察されることが知られている)。

数日が経過し、さらに何日も過ぎて、舌がほぐれるだけでなく、内面でなにかが起こる。突然、それまで感情を堰^せき止めていた奇妙な柵を突き破って、感情がほとばしるのだ。

解放後、何日かたったある日、あなたは広い耕作地を越え、花の咲き乱^{ひばり}れる野原をつきつて、収容所から数キロ離れた小さな町まで歩いていく。あなたは雲雀があがり、空高く飛びながら歌う讃歌が、歓喜の歌が空いちめんに響きわたるのを聞く。見渡すかぎり、人っ子ひとりいない。あなたを取り巻くのは、広大な天と地と雲雀の歓喜の鳴き声だけ、自由な空間だけだ。あなたはこの自由な空間に歩を運ぶことをふとやめ、立ち止まる。あたりをぐるりと見回し、頭上を見上げ、そしてがっくりと膝をつくのだ。この瞬間、あなたはわれを忘れ、世界を忘れる。たったひとつの言葉が頭のなかに響く。何度も何度も、繰り返し響く。

「この狭きよりわれ主を呼べり、主は自由なるひろがりのなか、われに答へたまへり」

どれほど長いことその場にひざまずいていたのか、何度この言葉を繰り返したか、もう憶えてはいない……だがこの日この時、あなたの新しい人生は始まったのだ、ということだけは確かだ。そして一步また一步と、ほかでもないこの新しい人生に、あなたは踏みこんでいく。あなたはふたたび人間になったのだ。》

突然、人間であることをやめさせられて、ある期間を経て、またある日突然、人間に戻されるという状態が精神的な危険を孕んでいない筈はなかった。フランクはその危険を「いわば精神的な潜水病」とみなす。《潜函労働者が（異常に高い気圧の）潜函から急に出ると健康を害するように、精神的な圧迫から急に解放された人間も、場合によっては精神の健康を損ねるのだ。》未成熟な人間の場合、《今や解放された者として、今度は自分が力と自由を意のままに、とことんためらいもなく行使していいのだと履き違える》ことも起こってくる。《たとえば、ある仲間とわたしは、ついこのあいだ解放された収容所に向けて、田舎道を歩いていて、わたしたちの前に、芽を出したばかりの麦畑が広がった。わたしは思わず畑をよけた。ところが、仲間はわたしの腕をつかむと、いっしょに畑をつき行行ったのだ。わたしは口ごもりながら、若芽を踏むのはよくないのでは、というようなことを言った。すると、仲間はかっとなった。その目には怒りが燃えていた。仲間はわたしをどなりつけた。》

「なんだって？ おれたちがこうむった損害はどうってことないのか？ おれは女房と子どもをガス室で殺されたんだぞ。そのほかのことには目をつぶってもだ。なのに、ほんのちょっと麦を踏むのをいけないだなんて……」

不正を働く権利のある者などいない、たとえ不正を働かれた者であっても例外ではないのだというあたりまえの常識に、こうした人間を立ちもどらせるには時間がかかる。そして、こういう人間を常識へとふたたび目覚めさせるために、なんとかしなければならぬ。このような取り違えは、どこかの農家が数千粒の麦をふいにするよりももっと始末の悪い結果を招きかねないからだ。今もまざまざと思い出すのは、収容所でいっしょだったある仲間だ。彼はシャツの袖をまくり上げ、むき出しの右腕をわたしの顔につきつけて、こうどなりつけたのだ。

「うちに帰った日にこの手が血で染まらなかったら、切り落とされたっていい！」

強調しておきたいのは、こんな暴言を吐いた男はけっしてたちの悪い人間ではなく、収容所でも、またその後も、いちばんいい仲間だったということだ。》

フランクはこう書きながら、解放された個々の被収容者たちにおける「精神的な危険」の次元を越えて、ユダヤ民族における「精神的な危険」にまで突き入っているように思われて仕方がない。周知のように、ユダヤ人の民族的な受難は、エルサレムがローマ帝国に攻め落とされて祖国を失い、全ヨーロッパに離散した西暦70年にまで遡る。したがって、どの国においても少数民族であるユダヤ人が少しでも勢力をつけるようになると、多数派の先住民から敵対視されるのは当然であった。313年にミラー勅令が発せられてローマ帝国がキリスト教化してくると、ユダヤ人教徒はますます異端として迫害されていく。更に、異端教徒のユダヤ人の多くが、キリスト教によって禁止されていた金貸し業を営んでいたことも迫害に拍車を駆けた。13世紀から14世紀にかけて、英、仏、独などで大規模なユダヤ人の虐殺や追放が相次ぎ、多くのユダヤ人がポーランド

ドをはじめとする東欧に移住した。

15世紀のスペインなどでは異端審問が激しくなり、異教徒であるユダヤ人は拷問にかけられ殺された。そして19世紀末における帝政ロシアでの迫害は凄まじく、ロシア革命後もユダヤ人の受難は続いた。移民の新天地であるアメリカにおいても、ユダヤ人差別がどれほど酷かったかは、エリア・カザン監督の映画『紳士協定』（47年）からもその一端が窺われる。ユダヤ人を専用居住区（ゲットー）に隔離する政策も、16世紀後半のイタリアで始まったものであり、17世紀にはすでに仏、独、ポーランドで実施されていた。ナチスのユダヤ人ゲットーは、ただその応用にすぎなかったのだ。因みに、第二次大戦の開戦直前のヨーロッパにおける国民総人口に占めるユダヤ人の比率は、独は0.8%、仏は0.4%であったのに、ポーランドは10%以上であり、この比率の高さからポーランドでのユダヤ人差別が緩やかであった代わりに、ポーランドを支配したナチスによる迫害も大規模であったことがわかる。

第二次大戦後から今日、漂白の民であることをやめてユダヤ人国家イスラエルをパレスチナの地に建てたユダヤ人は、なんと、アメリカの全面的支援の下にパレスチナ人たちをゲットーに隔離して、日夜迫害と虐殺を続けているのである。フランクルは解放された被収容者のある部分に対して、こう記述していた筈だ。「今度は自分が力と自由を意のままに、とことんためらいもなく行使していいのだと履き違えるのだ。こうした幼稚な人間にとっては、旧来の枠組の符合が変わっただけであって、マイナスがプラスになっただけ、つまり、権力、暴力、恣意、不正の客体だった彼らが、それらの主体になっただけなのだ。この人たちは、あいかわらず経験に縛られていた。」

そのような人々が怨念をこめて発する言葉も、一様である。「なんだって？ おれたちがこうむった損害はどうってことないのか？ おれは女房と子どもをガス室で殺されたんだぞ。そのほかのことには目をつぶってもだ。」この言葉は個人次元で発せられているが、民族次元での怨念になると、もう想像するしかない遠くの先祖が被ってきた数々の民族的な悲劇が歴史として加わってきて、「おれたちがこうむった損害はどうってことないのか？」という唱和が地底から鳴り響いてくるのが目の前に浮かぶほどだ。彼らの民族的な受難の前では「パレスチナ問題」などは、「ほんのちょっと麦を踏むのをいけないだなんて……」という程度のことであるかもしれないような気がする。

民族的な受難を経験したフランクルはその「まっただなか」から、こう憂えていたのではなかったか。「不正を働く権利のある者などいない、たとえ不正を働かれた者であっても例外ではないのだというあたりまえの常識に、こうした人間を立ちもどらせるには時間がかかる。そして、こういう人間を常識へとふたたび目覚めさせるために、なんとかしなければならない。このような取り違えは、どこかの農家が数千粒の麦をふいにするよりももっと始末の悪い結果を招きかねないからだ。」彼の予測どおり、すでに「もっと始末の悪い結果を招」いているし、「こうした人間を立ちもどらせるには時間がか

かる」ことも十分痛感しなければならない。このことはなにも「パレスチナ問題」に当てはまるだけではない。朝鮮人強制連行の歴史的事実を念頭に置いて、北朝鮮が「ほんのちょっと麦を踏むのをいけないだなんて……」というような調子で惹き起こした感のある「日本人拉致問題」にも当てはまる。

さてフランクフルトは、《自由を得てもとの暮らしにもどった人間の不満と失意》について、こう指摘する。

《不満の原因は、収容所を解放された者が、もとの生活圏で世間と接触して引き起こされる、さまざまなことである。つまり、ふるさとに帰ってきて気づくのは、そこかしこで会う人たちが、せいぜい肩をすくめるか、おざなりの言葉をかけてくるかだ、ということだ。すると、彼の不満はふくれ上がり、いったいなんのために自分はあのすべてを耐え忍んだのだ、という懷疑に悩まされることになる。どこに行っても、「なんにも知らなかったもんで……」とか、「こっちも大変だったんですよ」とかの決まり文句を聞かされると、自分に向かってそんなことしか言えないのか、と考えこんでしまうのだ……。》

解放された者自身に向かわせる以外にないこの不満を解消させていくプロセスこそが、日常生活への復帰のプロセスにほかならないけれども、おそらく完全なる復帰が無理であるように、この不満の完全なる解消も困難であるだろう。こんな人たちの許に戻ってくるために、「自分はあのすべてを耐え忍んだのだ」とかという思いを打ち消すことはとてもできないだろうからだ。「いったいなんのために自分はあのすべてを耐え忍んだのだ、という懷疑に悩まされ」れば悩まされるほど、《失意という深刻な体験》に覗き込まれなくてはならなくなる。《失意という体験では、自分がゆだねられていると感じる運命が問題なのだ。すなわち、自分は考えられるかぎりの苦悩のどん底にたっしたと、何年ものあいだ信じていた人間が、いまや苦悩は底無しで、ここがもっとも深いということはないのだと、そしてもっとも深く、もっとも落ちていくことがありうるのだ、と見定めてしまうのだ……。》

苦悩が底無しであるように、失意も底無しである。収容所からの解放を夢みることは、自分を待っている人がいるということとセットになっていた。《強制収容所の人間を精神的にしっかりさせるためには、未来の目的を見つめさせること、つまり、人生が自分を待っている、だれかが自分を待っていると、つねに思い出させることが重要だった。ところがどうだ。人によっては、自分を待つ者はもうひとりもないことを思い知らなければならなかったのだ……。》

収容所で唯一の心の支えにしていた愛する人がもういない人間は哀れだ。夢にみて憧れの涙をさんざん流したあの瞬間が今や現実になったのに、思い描いていたのとは違っていた、まるで違っていた人間は哀れだ。町の中心部から路面電車に乗り、何年も心のなかで、心のなかでのみ見つめていたあの家に向かい、呼び鈴のボタンを押す。数え切れないほどの夢のなかで願いつづけた、まさにそのとおりだ……。しかし、ドアを開けて

くれるはずの人は開けてくれない。その人は、もう二度とドアを開けない……。》

苛酷なホロコーストを生き抜きながら、解放されてから自殺した作家や詩人たちがいたのを私たちは知っている。先鋭的な作品を発表しながら、セーヌ川に投身した詩人のパウル・ツェランもその一人だ。自分で自分をもはや支え切れなくなったとき、人は失意の「まっただなか」で選択不可能な死に身を委ねる以外に術はなくなるのだろう。《収容所にいたすべての人びとは、わたしたちが苦しんだことを帳消しにするような幸せはこの世にはないことを知っていたし、またそんなことをこもごもに言いあったものだ。わたしたちは、幸せなど意に介さなかった。わたしたちを支え、わたしたちの苦悩と犠牲と死に意味をあたえることができるのは、幸せではなかった。にもかかわらず、不幸せへの心構えはほとんどできていなかった。少なからぬ数の解放された人びとが、新たに手に入れた自由のなかで運命から手渡された失意は、のりこえることがきわめて困難な体験であって、精神医学の見地からも、これを克服するのは容易なことではない。》

生きのびるために被収容者たちは、自分の中のなにかを壊してきたにちがいがなかった。自分を壊すことで生きのびてきた筈だ。生きのびるのに無傷である筈がなかった。おそらく解放された後にどっと襲ってくる苦悩は、生きのびることと引き換えに自分で自分を壊さざるをえなかったことと密接にかかわっているのは間違いない。もう必死に生きのびようとする必要がなくなった環境に放り込まれても、自分で自分を壊してきたものは奥深くかかえこまれたままである。苦悩は自分の壊れたものの中からたえまなく引きずりだされてくる。そこで問いは、何のために生きるのかというかたちをとって何度も突き迫ってくるだろう。生きることが苦痛で困難に思われてくればくるほど、問いは重たく申し掛かり、出口からますます遠ざかっていくのが感じられる。自分を待ち受けているなにかが自分の中から最終的にやってくるのかどうかを、世界はどこからみつめているのだろうか。

激動の20世紀を辿ったハンガリーのあるユダヤ人一家三代にわたる物語を描いた、イシュトヴァーン・サポー監督の映画『太陽の雫』は、生きるということとはつねに「まっただなか」であって、切れ目などありえないことを容赦なく浮かび上がらせてくれる。この映画もまた、単なるユダヤ人残酷物語ではない。ユダヤ人の衣装を剥ぎ取ったところでも、一家の栄光や悲劇がくっきりと際立ってくるのが無理と感じられないように描写されている。つまり、ユダヤ民族の受難にもたれなくてもよいところで製作されている。だからこそ、より一層ユダヤ人一家に加えられる弾圧の不当さが大きさを増してくるのだ。

19世紀後半、父の死により、12歳にして母と弟を養うことになったエマヌエルはブタペストの醸造所で勤勉に働き、25歳で独立する。死んだ父の秘伝のレシピで作った薬草酒に、自らのゾネンシャイン（ドイツ語で「日の光、喜び、太陽」という意味）の姓を付けて、`サンシャインの味`で売り出したところ、大成功して一財産を築く。

長男イグナツは法律家を志す実直な青年に、次男グスタフは医者を目指す理想に燃え

る青年に育ち、そして若くして逝った弟の娘を養女として育て上げ、その娘ヴァレリーも発明されたばかりの写真に興味を示す活発で美しい娘へと成長する。

イグナツとヴァレリーは愛し合うようになるが、父エマヌエルが二人の仲を許さなかったため、二人は人目を忍んでより一層燃え上がり、やがてヴァレリーは妊娠する。結婚の許しを求めるイグナツに、若い頃の恋が実らなかった当時の自分を重ね合わせたエマヌエルは二人の結婚を認める。オーストリア＝ハンガリーの二重帝国の判事として頭角をあらわしはじめるイグナツは、上司から出世のためにユダヤ風の姓を変えることを勧められ、落胆するエマヌエルに信仰を捨てないことを条件に認められ、ラテン語で仕事、運命を意味する「ショルシュ」という姓を名乗ることにする。

イグナツは腐敗がはびこる二重帝国で順調に出世するが、共産主義に傾倒しはじめたグスタフや、政府の腐敗を非難するヴァレリーと度々争いを起こすようになる。サラエボ事件を機に世の中が第一次世界大戦へと突入してゆくなかで、皇帝に忠誠を誓うイグナツは国内の反乱分子に対し次々と過酷な判決を下してゆく。ところが、皇帝が崩御した日に父エマヌエルの訃報を受け、自分の運命に対するいいしれぬ不安を感じるイグナツは決定的な事件に更に見舞われる。二重帝国の降伏と、愛が冷めていた妻ヴァレリーからの離婚の申し出である。帝国は革命によって終焉し、共産化した政府の幹部にグスタフが着任する一方で、イグナツは反革命罪で軟禁される。しかし共産政権も 100 日あまりで軍事政権に取って代われ、グスタフはフランスに亡命し、報復裁判を拒んだイグナツは体調を悪化させ、死に至る。そして彼の後を追うように、母ローズも他界する。

イグナツの次男アダムは兄のイシュトヴァーンに勧められて始めたフェンシングで才能を開花させ、カソリックへの改宗を条件に将校クラブへと誘われる。フェンシングを極めんとするアダムは改宗を決意し、洗礼の手続きの時に会った、既に婚約者のいるハンナを見初め、二人はやがて結婚に至る。将校クラブで新たな師マルギダイ男爵に出会ったアダムは、利き腕の左手に剣を持ち替える練習を積み重ねて、遂に国内の選手権での優勝を手中にする。息子イヴァンも生まれ順風満帆にみえたが、兄嫁グレタとの道ならぬ恋がアダムの前に大きく立ちはだかるうとしていた。

ベルリンオリンピックにハンガリー代表として臨んだアダムは、イタリア代表との最終戦にまで漕ぎ着け、「天に坐す我等が父よ……」とカソリックの祈りの言葉を唱えながら、相手を打ち負かして金メダルを取り、念願の世界一を果たして国民的英雄として凱旋する。だが、幸せの絶頂は長く続かず、グレタに関係を迫られたアダムは兄や妻への罪悪感に苛まれながらも、彼女を受け入れるが、ユダヤ新法が可決されるなど、ユダヤ人一家を取り巻く状況は刻一刻と悪化しつつあった。

ユダヤ人迫害への危機感からグレタは出国を迫るが、アダムは愛国心と家族愛から受け入れることはできない。ナチスはやがてハンガリーを占拠し、ユダヤ人たちをゲットーに押し込め、強制収容所に移送する。さまざまな迫害がアダムの目の前で繰りひろげ

られるなかで、ハンガリー人のオリンピック金メダリストとしての誇りを失わずに振る舞うアダムを、ナチスは酷寒の中、裸で一本木に吊して水攻めにする拷問を行い、ユダヤ人であることを認めさせようとする。息子イヴァンの見ている前で、アダムは己を貫き通して凍死する。

ソ連軍によるブタペスト解放で第二次大戦は終結し、一家で生き残ったのは祖母のヴァレリーとイヴァンの二人だけであった。そこにフランスに亡命していた大叔父グスタフが戻ってきて、「なぜ父アダムが殺されかけているとき、大勢の捕虜たちはゲシュタポに反抗しなかったのか」とイヴァンを責める。「何もできなかった」と泣き濡れるイヴァンにファシスト狩りをさせるため、グスタフは警察に口を利く。上司クノールのもとでイヴァンの怨恨に駆られた非情な追及は、しだいに文化人にまで向けられていく。彼の猛烈な働きぶりが共産党の幹部の目にとまって、イヴァンは共産党に入党し、若くして少佐に大抜擢される。

イヴァンの有能さに惹かれた幹部の妻であるキャロルが彼に接近して、密通を重ねるようになるが、スターリン主義の恐怖政治に覆われる中で、いつ誰に目撃されるかもしれない危険と不安に駆られながらも、二人は密会を重ねていた。ところが、またしても反ユダヤ主義が台頭し始め、イヴァンを抜擢した將軍は上司クノールの取り調べを彼に命じる。しかし、いくら調べても罪のないクノールからは何も出て来ず、イヴァンが彼の無実を報告してもクノールを陥れようする將軍は、執拗にイヴァンに追及を迫る。無実のクノールを陥れることはできないイヴァンは、良心の呵責に耐えられなくなって警察を辞める。キャロルはそんなイヴァンとの関係から遠ざかっていく。

スターリンの死後、クノールは名誉回復されて葬儀が執り行われる。その席で、「彼を死に追いやったのは私である……これまでの自分に別れを告げよう」と弔辞を読んだイヴァンは、その後民主化運動に身を投じ、ハンガリー動乱の鎮圧で捕らえられ、三年間の懲役に処される。出所したイヴァンは祖母ヴァレリーの元に戻り、穏やかな日々を過ごす。あるときヴァレリーが、曾祖父が一家繁栄の基礎を作った薬草酒`サンシャインの味`のレシピを捜そうといいだす。イヴァンとヴァレリーは部屋を引っくり返して捜し回るが、見つからない。ヴァレリーは居間の本棚を捜していたとき、突然倒れ、病院で名前を聞かれた彼女は朦朧状態のなかで、かつての「ゾネンシャイン」の姓を口にする。

その姓を耳にしたイヴァンは一家の過去に思いを馳せ、「僕は誰なのか」と悩み、自己喪失に陥る。ヴァレリーの死後、一家百年の澱を拭うかのように大量の家財を処分していたイヴァンは偶然、曾祖父エマヌエルが祖父イグナツに宛てた手紙を発見する。そこにはユダヤ人として誇り高く生きるための人生哲学が刻まれていた。曾祖父のレシピは見つからなかったが、イヴァンはレシピより大事なものを祖母のヴァレリーがずっと守ってきたことに気づく。どんなに悲惨な境遇の中でも、「それでも人生は美しい」と語ってきた祖母の言葉を噛みしめるように、彼はもう一度生き直すことを決意する。祖父が

改姓した姓からゾネンシャインの姓に戻す届け出を行ったイヴァンは、心からの解放感を味わうかのような表情で、穏やかな日差しに包まれるなかを足取り軽く通り抜けて行く。

改めて繰り返すが、この映画の主人公はハンガリーの歴史そのものであって、それを描きだすのに三代にわたるユダヤ人一家が登場することになったような気がする。1849年にハプスブルクに対する独立戦争を敗北したハンガリーは、67年にオーストリアと「和約」してオーストリア＝ハンガリー二重帝国となるが、その二重帝国が第一次大戦を経て終焉に至る時代を、身をもって生き抜くのが父イグナツである。彼が判事の道を進むのは、一段低くみられる金融や商売への跡継ぎを敬遠する富裕なユダヤ人たちの期待に後押しされていたという当時の背景によるが、二重帝国の判事となることによって、帝国の意思を法律執行者として体现していく。イグナツが上司の勧めで、ハンガリー語で「運命、宿命」を意味するショルシュという姓を選んだとき、その「運命、宿命」がイグナツの一家と同時に、ハンガリー国家に見舞うことになったのは非常に暗示的である。

息子のアダムが直面するのは、ナチスによってハンガリーが占領され、ユダヤ人たちがホロコーストの運命に見舞われる一方で、第二次大戦に突入していく時代である。ベルリンオリンピックでハンガリー代表として金メダルの栄光に輝く彼は、ハンガリー人であることを貫き通したために、ナチスによって非道な殺され方を被らなくてはならない。ハンガリー国民として生きようとするアダムの意思は、ハンガリーを占領したナチス・ドイツに否応なしに呑み込まれることになってしまったのだ。

ソ連軍によるブタペスト解放で第二次大戦は終結するが、ナチス・ドイツの手中から逃れたハンガリーは、今度はソ連の手中に収められて、スターリニズムの社会主義体制を歩まざるをえなくなる。ナチス・ドイツの強制収容所での父アダムの無惨な殺され方を目の当たりにした息子の三代目イヴァンは、当然のようにしてファシスト狩りの渦中に秘密警察の一員として飛び込み、かつての協力者たちを摘発する復讐心に燃える。しかし、父を惨殺したナチス・ドイツと同じことを、自分は無実の人々に行っているのではないかという疑念に駆られて秘密警察を辞め、民主化運動に身を投じて、スターリン死後に勃発した56年のハンガリー動乱の鎮圧で捕らえられ、三年間の懲役に処せられる。

いうまでもなくソ連に従属して社会主義体制を歩んできたハンガリーは、スターリンの死を契機に民主化運動を展開し始め、ハンガリー動乱のかたちをとって自らを表現していくが、ソ連軍に武力弾圧されていく戦後のハンガリーの歩みをイヴァンは忠実に体现している。このように辿ると、病院に運ばれた祖母ヴァレリーがかつてのゾネンシャインの姓を口にするのを聞いて、「僕は誰なのか」とアイデンティティーの喪失に悩むイヴァンとは、自国のアイデンティティーの喪失に悩むハンガリー（人）自身にほかならないことに気づく。自分を必死に取り戻そうとする中で祖母が守り抜いてきた大事なことに気づくイヴァンとは、ナチス・ドイツに占領され、ソ連に従属させられる中でハンガリーが深く見失ってきたものを取り戻そうとするハンガリー自身であり、本当の姓

を取り戻して心底からの解放感を味わいながら、柔らかな日差しの中を軽やかに歩いていくのはイヴァンであり、ソ連・東欧圏の社会主義体制崩壊後の社会に直面しているハンガリーであった。

三代にわたるユダヤ家を主人公にしている以上、「ユダヤ人問題」はオーストリア＝ハンガリー二重帝国でのユダヤ人の改姓、二重帝国終焉後のハンガリーでのユダヤ人の改宗というように、ユダヤ人としての社会的劣位から抜け出そうと上昇志向を目指すにもかかわらず、ユダヤ人の職業等が厳しく制限される新法が制定されたり、ナチス・ドイツのハンガリー占領によってユダヤ人迫害が徹底されていくことで大きく浮き彫りにされていった。戦後ハンガリーが社会主義化されても、「ユダヤ人問題」は根強く底流をかたちづくっており、社会への上昇志向に乗るかどうかの問題としては一切解決されないことが明白になった。もちろん映画はユダヤ人一家がユダヤ人として生きることをやめる努力に励むことのなかに、ハンガリーがハンガリーでなくなりつつある途への歩みをダブらせており、ユダヤ人残酷物語に収斂していきかねない描写の流れを阻止していた。

この三代にわたる男たちを1人三役で演じるのが、皮肉にも『シンドラーのリスト』の変質ナチ将校役でアカデミー賞にノミネートされるほどの好演を示したレイフ・ファインズである。父と子と孫の三代の男たちが、法律上の妹、義妹、人妻というように、いずれも“道ならぬ恋”に身を焦がす羽目になり、それらの情熱的な恋の行方が男たちの人生と時代の岐路に大きな影を投げかけながら、彼らを破滅へと促していく契機でもあるように描写しているのが、この映画のもう一つの主題である。女たちが時代の荒波を被って生きようとする男たちの単なる添え物ではないのは、男たちが次々と代が入れ替わっても、最初からずっと生き抜いて一家（ハンガリー）の栄光と悲劇を三代にわたって見つめ、自らの終涯を終える際に孫のイヴァンにむかって、「それでも人生は美しい」という言葉を残し、一家（ハンガリー）が取り戻していく姓（アイデンティティー）を示すヴァレリーの存在のたくましさのなかにあらわされている。

フランクルの『夜と霧』は次のような言葉で締め括られている。

《そしていつか、解放された人びとが強制収容所のすべての体験を振り返り、奇妙な感覚に襲われる日がやってくる。収容所の日々が要請したあれらすべてのことに、どうして耐え忍ぶことができたのか、われながらさっぱりわからないのだ。そして、人生には、すべてがすばらしい夢のように思われる一日（もちろん自由な一日だ）があるように、収容所で体験したすべてがただの悪夢以上のなにかだと思える日も、いつかは訪れるのだろう。ふるさとにもどった人びとのすべての経験は、あれほど苦悩したあとでは、もはやこの世には神よりほかに恐れるものはないという、高い代償であがなった感慨によって完成するのだ。》

この言葉からも、「それでも人生は美しい」という同じ響きが聞こえてこないだろうか。

2003年3月20日記